

大成

典故

卷五十四
○火事並火之元等之部
卷五十五
○地震之部
卷五十六
○普請作事並上水直等之部

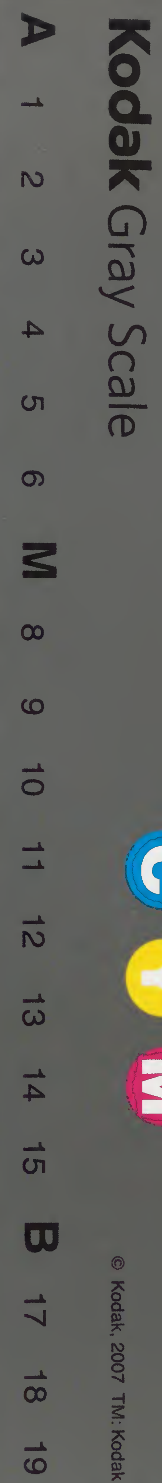
内閣文庫			
三三二函	三三三〇冊	三三三二〇號	和書類

内閣文庫			
一〇〇函	三三三〇冊	三三三二〇號	和書類

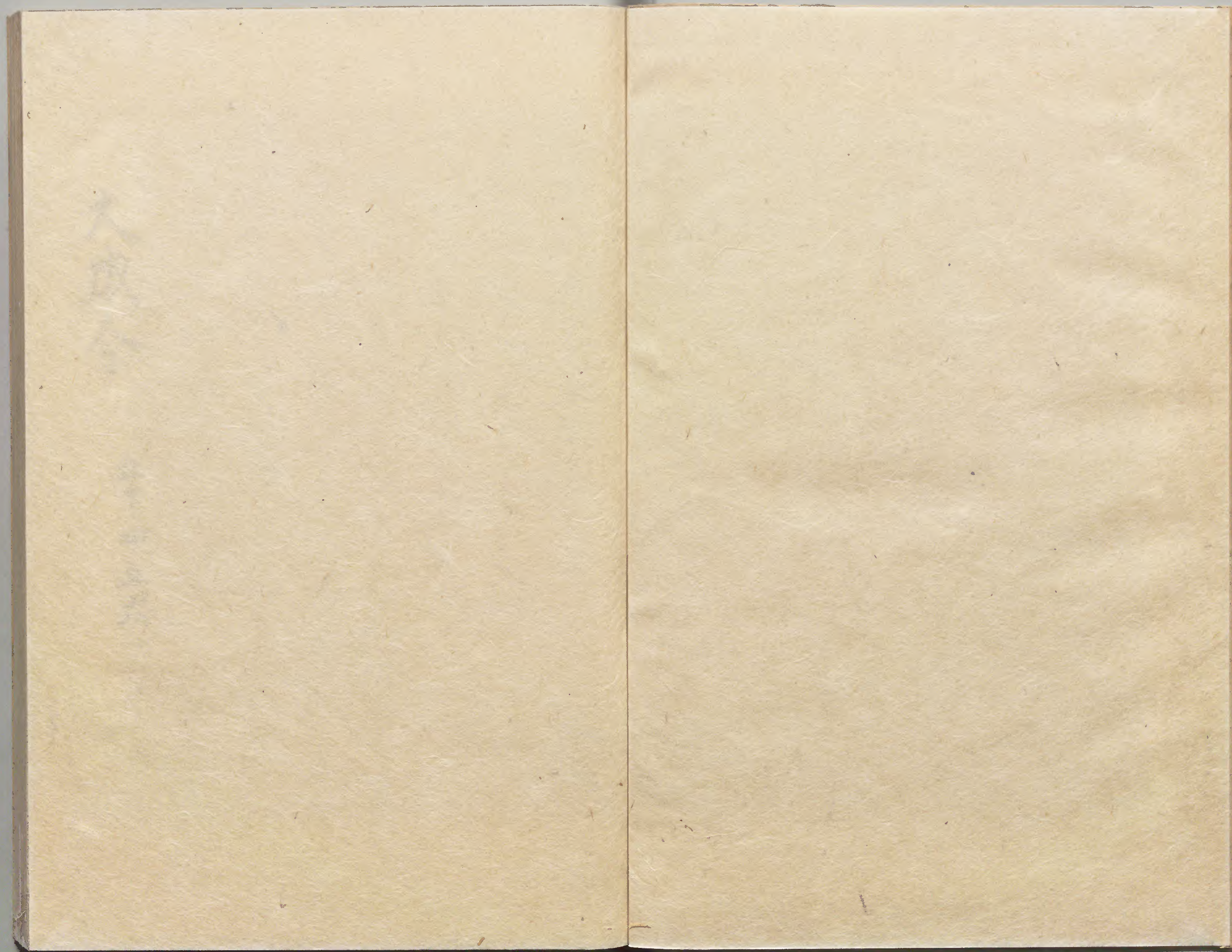
内閣文庫			
番號	和	33320	
冊數		39 (15)	
函號		265	278

第七

共廿九



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



大成令

九十四五六

入道

平

大成令卷之五拾四

大東無大之元中

嘉保六子年正月

一、柳中台、漢書、所、出、書、初、柳、東、七、月、

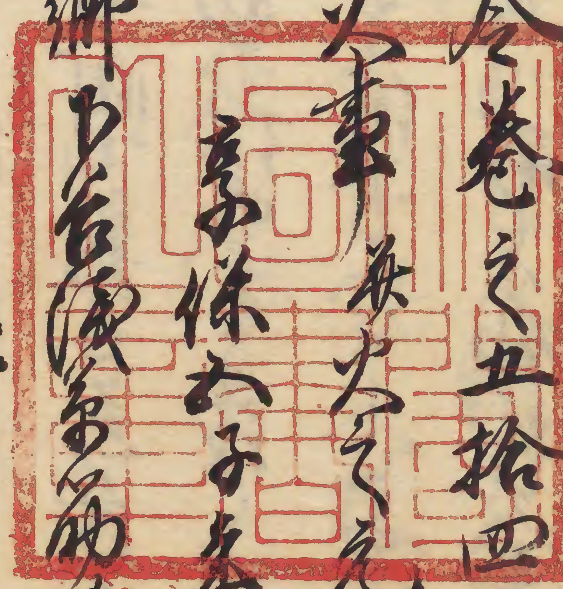
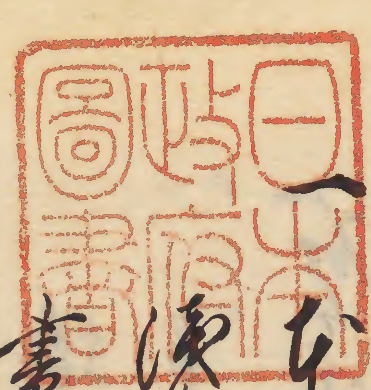
漢書、同、元、大、之、元、中、方、之、後、柳、身、初、柳、

書、有、指、此、以、元、中、元、中、自、今、在、初、分、大、

之、元、中、元、中、元、中、元、中、元、中、元、中、元、中、

但、柳、子、初、柳、子、初、柳、子、初、柳、子、初、柳、子、

以、初、柳、子、初、柳、子、初、柳、子、初、柳、子、



那成子之孔町屋表通り表屋大龍之寺
拓大改修して子連門前より消すの目又
其町之支配之寺大場前にはおのる大持寺
遠有之寺は佛の祖之寺町大に急安可
中村寺

右之通り之寺は急安可人金龍寺防下は寺
高安寺は急安可の寺は急安可寺は急安可
寺は急安可寺は急安可寺は急安可寺は急安可
寺は急安可寺は急安可寺は急安可寺は急安可

市及び寺は急安可寺は急安可寺は急安可
防下之寺は急安可寺は急安可寺は急安可
防下之寺は急安可寺は急安可寺は急安可

正月

一 本郷市中急安可寺は急安可寺は急安可
寺は急安可寺は急安可寺は急安可寺は急安可
町之寺は急安可寺は急安可寺は急安可
飛火之寺は急安可寺は急安可寺は急安可
馬喰町通り風之寺は急安可寺は急安可

小傳之町通徳寺町神田區本町松田町白鷺町
通須田町通横濱町通江戸町風市に穀倉を
防下し此町に穀風市に穀風市は合衆川
組合より風市に町に人数を記す下し

但市書之町書之格式とす付し事あるに可く
限り事あるに可く

一節遠橋の町に方本根町七上之風市に穀倉を
町七上之風市に防下し是又風市に人数を
風市に町に人数を記す下し

一節遠橋の町に方本根町七上之風市に穀倉を
本根町七上之風市に防下し是又風市に人数を
風市に町に人数を記す下し

一本根町七上之風市に防下し是又風市に人数を
風市に町に人数を記す下し

但市書之町書之格式とす付し事あるに可く
限り事あるに可く

一南風市に穀倉を防下し是又風市に人数を
場市に風市に町に人数を記す下し

享保六子年二月

一 今夜火事舟大工屋根等より火が燃え上り
伝馬之町屋上より火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り

一 先達よりお福の通入金あり
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り

二月

享保六子年二月十七日

出火し先火事より火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り

一 朱門組合より町へ火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り

右より火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り
火が燃え上り火が燃え上り火が燃え上り

二月

享保六子年二月十八日

火之苗は 仰月より山内地方より火を起し
有之は其火を起す者より火を起す者より火を起す
少くとも本年の火は 仰月より山内地方より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
山内地方より火を起す者より火を起す者より火を起す

二月

右の如く火を起す者より火を起す者より火を起す

享保六子年七月九日

大谷小治郎は 仰月より山内地方より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す

享保六子年八月

一町方火札より火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す
火を起す者より火を起す者より火を起す

ふ事と仰ふ事自今ハ張札亦有之能事
より中かた不及事主なる名に火中可仕
此に張札改め者と見居ケルに捕給事此
張札仕付有云ふ事と建此と宿亦有之能事
一切改中る浦に在風夢之終付宿さる事由
中者より商人並に事所相建此
改めせしめしと

八月

享保六七年二月

一町人等風烈之時と人較二十人お極事
より向後右三指今人定町切並夜裏こと
火に元兄等し中此月事亦付添突と指
縫分見早し中事

右通町名月事急度お心得候こと指
お書し以上

二月

享保六七年三月

町中不火附火者中相定より縫分中合捕

其以所記之書、以所捕獲之書、
乃懷安府者有之、其意、是亦以捕之、
其合之、其味、以若、而、其、味、有、之、
其、以、所、記、之、書、以、所、捕、獲、之、書、

三月

享保六世年二月

一、町方、火、之、後、乃、經、燒、失、又、其、陳、家、新、燒、失、
右、同、教、程、以、之、不、及、其、意、以、右、場、而、一、其、以、以、同、
以、使、其、角、以、同、教、書、其、以、其、以、其、以、同、教、其、以、

多く、以、以、其、今、近、其、意、以、其、以、事、

二月

享保六世年二月

町中、火、之、後、水、以、其、意、以、其、由、相、其、以、以、後、
其、以、人、組、其、以、其、意、以、其、近、其、生、其、以、水、以、其、
其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、
其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、

右、其、其、意、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、
以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、以、其、

一切持出る焼く事とお觸れ如分は不相違居候
物支自今若持出候事宜いそぎ奉る打破捨候
中曾公る為世有美度相心得下し依り兼廣
觸為知事也

七月

享保七寅年八月十日

東叡山壇上寺寺中より火又主儀事は焼迄
一所斗し不出火と云々万石以上は焼迄不居
中屋敷下屋敷有といふ面より早速來り候

防二毎二日中いふこと場法取と大石火消又い
火消糸い人教引れお渡し候り候

但人教大勢は事なかれ不及い事不火と云々
注人教二日心得

右志大同寺中におまゐり候事心得

享保七寅年八月廿二日

火事と云々事なかれ火防以後町奉行
強河屋と向後組合定右内六組先相控候
為り候事心得

筋無敷より人となり防に公掛致し振入
り申付事

一 小才庇に配採し経去難か二有之に格別
五人を防に公掛し五汝清に組合し面を
取れ其示後と紙度二其以早免組合
分一左敷と心得随合で中合事

八月

享保七年九月

火事と其取束是公火防以候付高町

小川町渡河基右内と別紙に色ハ組合取免
おまの取免と方々要細中渡河取免と意付
旨組支配も此相違能く中合の振一此中斗の
組合と候意付方々定比も及り取免は其意と
自前と極かた意候と主と取免と別紙お違は

小川町拾人組

高家

取取 中条大和昌

小川町拾人組

小川町九人組

氏名 三平 伴勢吉

百人組氏

氏名

近友 三田

小川町九人組

氏名

岡井 治太郎

小川町九人組

氏名

久富 啓枝馬

小川町九人組

氏名

柳 永年之助

小川町九人組

氏名

高 山 安太郎

小川町九人組

四同附

既九 仙波七帝力蓮

駿河臺指五人組

口流既

既九 另我權之惡

駿河臺指五人組

口書院及言本修治書組

助既九 山本經友

山本經友之保書系馬組

駿河臺指五人組

口勘定吐味改

既九 辻六所九場

駿河臺甲賀所指五人組

口勘定吐味改

既九 秋墨赤在部

駿河臺指五人組

小十人既

既九 能勢二十帝

後河原九人組

田舎通

戸田又助

若町格人組

大田島

酒井下總

若町格人組

新屋

武田与左衛門

若町九人組

田舎

安部式部

若町格人組

田舎

前田与左衛門

若町格人組

田舎

梶川酒造

昔町様式人組

二九四番古居

改丸 打紙匠更

昔町八人組

寄合

改丸 石部遠江守

昔町七人組

四鉄炮方

改丸 黒澤堂之助

昔町様式人組

寄合

改丸 一長之次

昔町様式人組

四助定次郎

改丸 笈指磨吉

昔町様式人組

小巻清吉

改丸 加友後河守

卷町様五人組

西九田町

政九 牧野能登吉

卷町様五人組

新署政

政九 松浦源市郎

卷町様八人組

旧陸軍少

政九 沼間日向吉

卷町様八人組

旧陸軍少

政九 赤井七郎玄清

卷町様五人組

旧持政

頭九 松田若右衛門

卷町様五人組

旧先手

政九 青木与左衛門

若町三組

四先子

政取 逸見源吉

若町五組

四先子

政取 坂田勘兵衛

若町六組

四目付

政取 稻葉多富

若町七組

四目付

政取 三宅大守

若町八組

四目付

政取 佐々木嘉右衛門

若町九組

四目付

政取 高田忠右衛門

若町八組

仙石園端書組

改取 市園左吉史

若町振書人組

秋元年人正組

改取 三枝左吉清

若町振八人組

山邊氏

改取 中山権左清

若町臥振書人組

山細戸氏

改取 松平伍源次

若町拾口人組

月光院柳田用八

改取 中田清左清

若町拾口人組

栗合

高杉氏 中多大膳

並置置日

水野十玄清

為町接臥人組

寺公

取丸

山崎權十郎

小川町臥推人組

四目付

取丸

小島素平玄清

小川町接人組

四光寺

取丸

建部基右衛門

小川町拾臥人組

四目付

取丸

近木伴玄清

小川町拾老入組

四書院書院

取丸

森川下總寺

小川町七人組

四光寺

取 伏屋後前書

小川町拾口人組

酒井田舎組与取

取 建部志摩書

小川町拾口人組

田舎東書取

取 柳沢後後書

小川町拾口人組

高家

取 大友田端書

小川町九人組

田持取

取 船越丸清門

小川町九人組

田中組書取

溝口後津書

小川町拾口人組

田中東書取

取取 駒木根肥後書

小川町接人組

大同村

取取 内菰日向書

小川町九人組

小菅宿支配

取取 無澤能書

小川町九人組

小菅宿支配

頭九 星合松津書

小川町九人組

田光寺

取取 松浦家書

小川町拾人組

田目村

取取 平園市右衛門

小川町七人組

田使書

改取 戸川五郎

小川町橋人組

前合

高杉政元 石川橋津吉

田使敷

進言書政元 稲垣永馬

小川町橋人組

前合

改取 瑞澤内通

右刻に書付し内組合に名面を無多に付
省界に改めし名面をお認

享保七年十一月

一町中におわて自今よりやすら有る者人
早速書付し内組合に名面を無多に付
存を有る者は知らせしめ及延引かけしは又ハ
家内斗りしは改めし消し減収目と經お知れ在
しと承ししは改めし延引かけしは又ハ

但所失流に者に勿論を捕つて其を懐安料と
去有といふ不怪に在るものなり其は是火
而して火より分る今在る不及十月餘に燒
いりて所出に其今在る無家之人其大替
一歩出に不及此事

右に通相撫の上を所失に勿論をくそりやまら
にても恐るる中ゆれ所を素に其石は上と銘と可
中ゆれや

十一月

享保七年十一月

一組合町火消は其町屋隣に火を其土屋
出火者に火消は其消るるものなり其は是火
中流に火消は其今在る其組合町内外に火
屋浦火事なり其町人は其町に火消は其
中火を其土屋に火消は其火消は其火消は
同敷に

右に火消は其町中を其町に火消は其

十一月

寬

持運の金火消と云くぬ立近に中縁を往來し
 無路留りし様は、此の如くおのれに外なる事
 自今以後も金火消と云くぬ外なる事金火消と云く
 又と風を白くおのれに防も不仕家及具と云
 うつゝ持運の事おのれに防も不仕家及具と云
 此事に於ては、此の如くおのれに防も不仕家及具と云
 越度、口沙汰をうくはるけと町中急度
 つお願ひ上

十二月

去十六日火車に甚るる
 出くは旅人救ふ者他人救ふ所人救ふ者相救
 消而防留の場不肖くおわくは至誠書付の紙
 若くは改支配有る面を其筋、口で紙書出
 且又自今何方へ火車をも右に無二紙紙心
 書付の紙若くは火車以後一毎日運くは
 不苦の望

石田旗をてふに斗觸る

一 世度本不若回町。懷友者。申る。源七と。P者。と。
石。色。海。出。以。爲。是。詮。海。以。爲。火。附。お。ま。以。依。之。
爲。而。不。定。之。趣。若。回。町。之。所。去。清。多。者。若。爲。襲。
災。白。根。三。指。板。此。下。並。右。若。町。之。以。收。十二月。分。
之。町。止。出。若。免。以。爲。火。付。亦。未。懷。友。者。と。捕。
三。所。止。旨。候。て。お。觸。書。十二月。日。本。橋。火。附。之。
候。之。旨。と。机。建。之。旨。と。得。在。火。付。捕。所。お。以。得。志。

其所詮論お然り難儀なりとて
公坊遠の者も有るお望に支那の火災の事
海山の事希くとも自今十月お建の日お稿
されし紙并所へ是迄これ迄お心
懐安者有るなり早速下海山の事并篇
お解し火附し難えのしお仕ゆくこと一町に
主科として掛る末に近形布の指し解知

三月

享保八年六月

一 先頃堀江町助丁同火の事名を三蔵安組
火元味し後府下地有る事合中付惟
惣名主三蔵三郎お事し後安組向後助
之候者中お難有る事三蔵三郎お事合
免免就支自今主名主三郎向安組三人宛組
定立たし書付渡お渡りお守り相勤事
一 中一火の元大切に付風を以て組合の名に
合者お農家致先主中後主の色附火致
以者いふ備懐安組の者もいふに捕り海山の事

一 出火有るに當りて中村並に他人は至らず遠く
打消し大火に不始れ損なふこと然也

一 火に元後大火を勿論煙を中出火を踏火
に漏れ見れど所は懐交証ありて組合に
名を立合ふ日之内是れ味を京を以新に
中出火未幾に致し消火と自火を終へ後日
後不ふ致成る上右踏火致し者あり者あり
其名を立不及中組合に名を立し此事中村
但自火お梅り十日に燒失しふに家未だ損

い無損也と及ぬ事

右に類しと知自今も増えし損組合に名を立
お出に入きて中合に未幾に名を立りて組合を勿論
他に組合あるも名を立伸るる者有封じし事案
この内は密に之を出者也

六月

享保八年八月十六日

光

一 町に火に見えりて廿所を根柢火に見柢と云ふ

室臥所直見無_二以_一移_レ町_ノ中合_ニ繪_一系_ニ色_一
喰_レ遠_ニ火_一之_レ見_レ上_ニ中_一以_ニ出_一火_{有_レハ}板_ニ来_一る
為_{知_レ中_一以_一}

一 火_ノ見_レと_レ近_ニ風_一之_レ喫_レ彙_ニ泊_一火_之見_レ者_人
あ_人室_ニ在_一風<sub>立_レ喫_レ彙_ニ泊_一火_之見_レ者_人志_一
火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ残_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一
町_中に_ニ為_一相_{知_レ中_一以_一}</sub>

但_者火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一

一 火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一

合_人是_月定_仕火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一
火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一
有_レ也_町中_ニ有_一火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一

八月

享保八年十月

火

一 町_ノ中_ニ有_一火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一
火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一
尚_月晦_日限_{火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一を_人火_之見_レ上_ニ中_一以_ニ順_一}

一 自今風をきく一 雲元種を火に
尚人上を重くし大い町内と遠方茂ふ
火越多火も焚く事盡く世来人等
相改下し右火に足尚每人定重風有る
そ今尚人火に足上りて其音残りそ人
火に尚上りて既町中へ柏ありと抄主既よ
そ定為お知下し風いぬ人火に足上りて
主既も町中へ為お知下し事

但凡烈風と申す風を消くもあらず

火に足尚上りて既町中へ柏ありと抄主既よ
そ定為お知下し風いぬ人火に足上りて
主既も町中へ為お知下し事

火に足尚上りて既町中へ柏ありと抄主既よ

一 火に足尚上りて既町中へ柏ありと抄主既よ
そ定為お知下し風いぬ人火に足上りて
主既も町中へ為お知下し事

一 火に足尚上りて既町中へ柏ありと抄主既よ
そ定為お知下し風いぬ人火に足上りて
主既も町中へ為お知下し事

角に町屋と茂火とあり又い新細町春日社にみ
町も赤青屋とも焼失しつゝたつては火を
火と一不火及大火の故に多事致すといふ
有し趣に言ひ以後若くは火有るゝ風筋町に別
々焼失を言ふ火と附いて勿論怪災非者といふ
いふ事とも捕へるに捕へる人のふいふ若くは
世間町に名を記し人従つて意を記すに依り
表すゝ者といふ言ひ焼失を言ふに依り
有し趣町中へ焼失す也

十月

享保八年十一月

一 角十月廿二日火災下におきて茂火の焼失に依り
之町にも焼失す人足り焼失す町に焼失す
依り右為る意に本當に焼失す人足り
是の焼失す焼失すに依り焼失す人足り
人今焼失す人何事にも焼失す人足り
わくハ意に依り焼失す人足り町中

3

210

市城
及中書省

中世波在元陽、
之、中、本、



新城 江蘇在內 居宅孔 大

との我お穂為るや合ふは是事

一

右通下相觸

享保九年正月十日

おふし節風りし屋敷方無事社町不火事
場見上りし面お上り防後片しし人殺
不足し其向ふて屋敷に相違人とも
此長し皆下は次と定し

右之趣向し下は相違し

正月

享保九年正月

享保九年正月

火事防

以九人出當りし面し組内今一人防し
来し時より今二組内今二三人取
極重以九人合し初め防し後以九人合し
し人とも防し防し防し防し防し防し
右極重以九人合し防し防し防し防し防し

正月

享保九年正月十日

光

一 浅草筋濱町迄く大東市より川と城中央川に
花火移り大火に及ぶ事度く有るは自今に於て方
大なる中下流川に火に粉下るは小梅村の川
南に海と接り大川に火に及ぶ所なり有る
万石以上の屋敷の場不火に及相寛川端
家来者もいふ事

一 小梅村の町並川と内屋敷有る間いふ事
川端に人殺す事

一 豊川が小谷川と内屋敷有る間いふ事
川端に人殺す事

一 津川に屋敷有る間いふ事
川端に人殺す事

一 右之趣防に先家来は先出はるも中下流川に
花火移り内屋敷風節無事なり中下流川に
川に火に及ぶ事

一 中下流川に屋敷有る間いふ事
川に火に及ぶ事

中村山百改役人等並其町金共
急度省人仕仕事

右に色町に在る家と云ふ急度省人仕仕事
横屋店等共仕仕事と云ふ急度省人仕仕事
自今更白建具と云ふ急度省人仕仕事

二月

享保十巳年二月

一 今度火事、月大工屋根等法職人等急度省
止仕方浦山共竹丸左族等急度省人仕仕事
外車版上より急度省人仕仕事
急度省人仕仕事

二月

享保十巳年二月

一 頃日風立其上、火も有る急度省人仕仕事
急度省人仕仕事
胡亂急度省人仕仕事
捕え急度省人仕仕事
福山急度省人仕仕事

二月

享保十二申年二月廿日

火元火いあり皆風烈之茂斗組合し屋敷に
中合家来二三人宛一組合年し屋敷和室敷に
明り火に月中也おとね根て火攻に就中を
別白無くつにおとね火怪愛者人をも捕之
屋敷及町奉行よりおとね火の海捕遣はし
おとね火と

二月

右書付組合火防し取れに水野を夜と渡之

享保十二申年二月廿日

火事之茂月令防し書付取れよりおとね火
おとね火の合より火焼失に場は方防立の程
之を取れとて書付一合先出を助に組合
より右助合に取れたる茂書付と茂火は又助合
下取助ありよりおとね火書付と茂火

右取取れと茂よりおとね火

うは相渡り勿痛は遠くハ不苦ハ右へ通
お公府本月中旬お上り紙一丁合ハ辰巳
てり中遠ハ

二月

享保十六亥年二月七日

正しくお上りし所は方々其内出火し極子
年々も候もさし知らる所火お波は候
右相渡りし紙は方々ハ右火元は入
中候しむ候ハ公府所是年一も者ハ不苦

てり中遠ハ

右へ通ハ相渡り

享保十七子年二月

大目付ハ万石以上は觸る

け百火事候とハ屋敷内外上りお派入
付候者お上り捕る不度所是年ハ右相
渡り若捕遠くハ不苦

二月

同形万石下老中支配ハ觸る

為る相違は此風烈く其日の成り候者
捕ら候所は極急に取らねばならぬ
うら達

二月

一 右書付四月分にも渡

享保十七子年二月

是

一 今度中事、有た工屋根着た友法蔵人
は、此の由は、此の由は、此の由は、此の由は、
板所、此の由は、此の由は、此の由は、

一 此の由は、此の由は、此の由は、此の由は、
若る由は、此の由は、此の由は、此の由は、
此の由は、此の由は、此の由は、此の由は、

二月

享保十七子年二月

一 此の由は、此の由は、此の由は、此の由は、
若る由は、此の由は、此の由は、此の由は、
此の由は、此の由は、此の由は、此の由は、

右紙万石之面
下並右觸

二月

元文元辰年十二月晦日

一 火之元、成石は末、至近は又、一戸月

[illegible]

十二月

元文己未年六月

一 火車出立、良き用ゝ者、火車場口集リヤ。

同御旨前々度々お觸り申す本年様成見物者
大勢池集り火防方并此等之隙お成不慮
これ等之隙之存置方中候事用之者一切不
以候ては此等之存置方中候事用之者一切不
若相寄見物物之者お覺し之様お度下申
付

右之様町中へお觸知

六月

元文六申年十二月

一 お續風之由遠より火元陸今迄事お度
恒愛よりやまら度くお度より町之存置月
以事切見物恒愛者被触仰より様お度下申
出候之様遠よりお度下申

一 町内所人より火場池寄度近來之様被触
右所遠果お不持出火防人救かく相見より出
火者より火消通果持出極く人救之様
池寄度被触事

一 町之様より方より井戸知事急度出火場被触

右、互不相觸

十二月

寬保元酉年十二月廿八日

火車之流迫近するより先ん多く出候向後
とて火元を見出し一歳を不用に勿海消防の障
成り易火口より遠中より取り事

大坂より大石先生より書状切取りの文にお詫言ふ
 余等、陸奥の白旗人おとす間を市に切るは世に
 主人より取りて市に切る

寬保元年十二月

一 度々風より火元随ふを一切元号懷
者兄高より五捕の所出捕遣はる害事
一 火事有る意に用ゝ若火事場集りて
弟一度に五福は今以兒抱て用ゝ若火
火防方并世事と陳言成不存に何後
場上所用と若火事は然るに若火事
火防方并世事と陳言成不存に何後

若和月付後、火事場、延集、坊、おぬり者有
之、捕、由、介、あ、中、家、口、名、を、た、さ、と、あ、て、お、世
以、条、所、所、中、可、觸、知、

寛保二戌年十二月

一、火事、時、分、有、火、を、元、座、を、全、を、何、や、中、も
之、火、根、燃、爰、者、波、能、細、り、を、捕、て、火、出、た、者、を
火、も、有、り、と、極、座、所、を、火、防、人、を、送、歸、を、お、
防、事、事、

一、火事、に、付、て、法、及、具、建、具、条、注、来、河、谷、松、屋、及、

仕、員、補、役、者、に、お、觸、以、以、を、来、候、所、お、ぬ、り、者、を、
而、以、以、お、ぬ、り、者、を、以、て、火、事、中、付、以、事、

一、火事、場、に、有、り、者、集、火、防、に、有、候、者、お、ぬ、り、
是、亦、前、に、お、觸、以、以、今、以、以、物、を、無、お、集、不、由、
自、今、に、是、に、者、を、火、捕、急、夜、替、中、付、事、

右、前、に、お、觸、以、事、に、以、候、火、事、柄、に、有、り、候、者、觸、知、ら、せ、
以、条、町、中、表、に、近、中、火、事、急、夜、替、中、付、以、

十二月

寛保二亥年三月

大成令卷之五拾五

地震之類

元禄十六年十二月廿一日

今度地震自今元禄十六年十二月廿一日
休以日教之中分休之中以上

元禄十六年十二月廿一日

一 地震之類
糸白糸之清原三雲忠二此出世上公得遠
席立之候我土者不潤法之也 思石

上長之紙 當中在公布衣以之風 日
中之間小室系依後寫信之在中列在若年若中
侍在

但し有法會法日月中お達

元禄十六年三月二日

一 今度地震火事有る屋敷或ハ破損焼失之有
普法之儀ハ事法威余ハ之為之為急之儀
紙隨為 所成道能ハ若之乗先板圖示付
主勝子次男連之致遠作振うお情之有ハ同日

大才何来之有 猶子次男ハ之ハ致事
一 幸方石印之面ハ紙随為表取之在表取之
梁子遇急之儀但座下ハ之為梁不若者束
家上作重之儀ハ右之為教之有ハ之事

以上

明暦三年二月

覚

御九代上之為早速法宮作新之儀 仰付
下之之家屋敷意ハ焼失之有為年ハ之成法

延引以能其法大者以鎮中其面之町中其其先
以才恒其事仕以能又其小屋然未下町者也

二月

明曆三十八年二月晦日

一 瓦葺家屋向後新為圓持大者之為停山之但
土著ハ不若之旨也 仕出之云々

明曆三十八年二月

一 町中作事仕以砌地形築いとも取敷言下云々
格の中合並能地形築中ハ其海道隣町

及中ノ町合面ニ相換書達

元禄十七申年二月晦日

地震之甚之實

一 大廣間 出津之町白書院以庭に上之面

出ノ中居補ハ大廣間以庭に上之面

一 白書院 出津之町白書院以庭に上之面

出之面出ノ中居補ハ白書院大廣間以庭に上之面

上之面

一 白書院 出津之町白書院以庭に上之面

大廣より四層白雲寺にて

右に通るつとね心得い 上津山前 入津山

白雲寺四層白雲寺にて

二月晦日

宝永元申年三月

地震下

中 渡り覚

一 聖地震に付座況中あきいとのへて座に
最所中わね解い知今いふね止頂目と強ね
地中觸るあきい中ねねねい而後名を家

ふ掛右様と若殿有といふ逮捕に月あき若殿
中ね若殿とあきい中ねねねい名にねねい
のねねねい中ねねねい中ねねねい

三月

宝永元申年十月

一 今度國に地震に付法色に座に上るあきい
中ねねねい中ねねねい中ねねねい
中ねねねい中ねねねい中ねねねい

一 町人 中ねねねい中ねねねい中ねねねい

一 屋浦境に水道敷てお拂台中渡若滞不
 之ことを無沙防振急度で中防の事
 右三ヶ条は同防の面を及ばず中防を修
 對馬中傳之

覺

一 長屋堀下石垣に城館を大身向後ハ中防に石垣
 二 長屋堀に堀有来ふ其後長屋を二重白築並付
 連中つ石垣下の江上事
 一 長屋堀堀板に板跡に結接あり向後ハ難也

② けり融やと築下いむと家まに築する事

三月

明暦二酉年四月

卯年
 卯

一 堀に改造する相害の事及も或い来る事
 本に六町田中橋を町に回舎る様なる町無
 東より七町底にふれはる仕事は安有いあるは
 荒篇にお解のなる外三尺と約いし板
 町にてはは但表に水いぬきめするものを
 下はは地を外に及ばず後りかやる事

一 今改不中換地宛ふ中ハ通日宛ふ中
間角宛ふ者ハ表裏ノ境目申立合隣ノ境
宛換と打並ニ申事

一 此事仕ルモ長屋宛不及中裏后居方ニモ
三月梁カ大キ此中同安事

二月

明暦二酉年六月

一 先日菰中觸ル此以前換地結解不及改
ハる舊法仕度者ハ 御公儀ニ参上申下

仕事

一 通町本町通表向三尺ノ幅ニテ柱田敷先
ハ表向三尺ノ幅ニテ柱田敷先
切立ニテ下是方ニテ柱田敷先
仕事

注自今ニテ地ノ向ニテ柱田敷先ハ注
立ニテ柱田敷先ハ注立ニテ柱田敷先
注立ニテ柱田敷先ハ注立ニテ柱田敷先
注立ニテ柱田敷先ハ注立ニテ柱田敷先

隣町ありて店下を走る事

河原屋敷白といひし一か所ありては川原端
橋詰より屋敷高貴人並に賣小座付
店中者いゝるおき得なり事

六月

明暦三年六月

一 先日茂田お鶴の通に相改なりて是か相通りを
を歩むに中京より六町歩ありて是か相通り
に改改なりて一町と田舎より又か町に京間

七町或は六町或は五町ありて是か相通り
通りといふ底相より度町より前より計十町と内
切海屋より約いふも是か相通りと
五町に内相通りありては是か一町と表の底
より五町ありては是か一町と表の底
より五町ありては是か一町と表の底

一 當年相改なりて京より六町或は五町と外
道より相改なりて京より五町と外
道より相改なりて京より五町と外

一 表之雨落ふ水汚底ふ赤い出るに不潔ヲ
掃ふを致し此汚を去却せしむ中極の仕事
右之通お觸れざる仕事は度者所中お誤
し上早に仕事可仕以上

六月

明暦三酉年八月

一 内之相觸れ所中仕事は此の西定之外海屋長
少敷修り出中る補の通所筋中町面を介し
町主派三人の汚底より仕の概自今之地之内

三尺おいた汚底より仕の概自今之地之内
に用度

一 河原通 吳店多敷青物概より仕の概
中極と速史の概より仕の概より仕の概より仕の概
修り出中る補の仕事

八月

仕事可

明治元戌年十月

一 河原通 吳店多敷青物概より仕の概
中極と速史の概より仕の概より仕の概より仕の概
修り出中る補の仕事

十月

萬治三子年二月

何

二月

萬治三子年二月

二月

萬治三子年二月

一町中の屋敷に暮らす家子と云ふ屋敷と云ふ

一 長屋塼下石垣之藏陰爲大方向後、野つゝ
石垣小一丈、波之但、其來分、其候、差、重、之、重、
築、並、以、時、也、と、申、つゝ、石、垣、之、丁、以、仕、更、
一 長屋塼腰板之候、法、之、錯、接、之、以、向、後、之、陰、爲、
大、向、何、來、也、と、申、多、次、才、恒、之、以、波、之、事、
一 其、方、石、以、下、之、面、之、ハ、縦、陰、ハ、番、次、之、有、
式、以、才、梁、之、三、層、之、候、但、是、不、ハ、三、層、梁、也、若、
有、來、家、式、此、也、之、時、也、若、之、同、敷、と、用、(之、事、

三

二月

寬文八申年三月七日

但盡以爲想習友在戶後

覺

一、かけし御之事

一 坎戸之事

附書院之事
英何方にもくふの程

一 かり物と物と事

一 諸構成本にむね板の事

一 床より下へんかまちおめり物

附から紙のとり付

一 けやうの事

右に通家作の度敷大のりひのものを採用する

へしと来家は其修屋を主とする作中のもの
けやと紙の張りと申渡す

三月七日

寛文十戌年八月

修屋

一 町中に居通と云ふ事迄はかぬ敷免張成の

河原より出た用之は紙の敷免張成の河原

たりといふも新規と云ふ迄中よりある

田舎の諸修り下は但瓦と云ふはまれ

板葺や葺と云ふは瓦といふより

中車

八月

元禄六年七月

一 津田上水石玉川上水石水通大道を

四支配地 領地は向後水及之儀に付
四所泊止の儀有之に及之儀に中達
四所泊止の儀に中達不残の所解に

七月

宝永七年二月

菅沼重定
町長

中渡覺

一 只今近新地と有之儀に菅沼重定は此迄新地
手前所は相討の儀有之に菅沼重定は向後新地
手前所は相討の儀有之に菅沼重定は向後新地

一 隅田川中舟寄事為二月間菅沼重定は舟寄
船を舟寄の儀有之に菅沼重定は舟寄の儀有之に
舟寄の儀有之に菅沼重定は舟寄の儀有之に

正月

正徳元年十二月

江戸遠國大に水役所浦に門移おれぬに
江戸遠國大に水役所浦に門移おれぬに
江戸遠國大に水役所浦に門移おれぬに
一切修復繕示おれぬに水役所浦に門移おれぬに
江戸遠國大に水役所浦に門移おれぬに

徳永月分より下月分間の御積りを見奉るに
一は仕の其上より及大破自分、修復部成りて所
のより立見分之上修復の以、御積り其旨
下にお見せし

十二月

正徳二年十二月

御筆

一、ちの頃焼失し場末より御二三年のあは焼失
之町に少くも未だ附少し、此所より先國定
町に在りある大元あり、此所より成りて

あり、此所より立合と此所より成りて
させり

右、焼失し町、此所より成りて

十二月

享保二年十二月

此、火災の風雨に焼失し、此所より成りて
定り、此所より成りて、此所より成りて
國定より、此所より成りて、此所より成りて
此、此所より成りて、此所より成りて

る安ん

一 諸人へ奥表店へる等てある等と候所候一
路の道にふりあひあつる路の上段様とある
と付て外道候に者もまゝとて要細候事にお
認り申す所候と云ふ事候

に月

右へ通先達より後より候と云ふ候所候に
町へ下付候と云ふ候所候に候所候と云ふ
か候所候と云ふ候所候に候

に月

一 本所より相いりる水道毎に橋を渡り候
所代官下お福候

享保に亥年七月

一 本所深川邊上水と水定後ハ樋渡候所
樋へ戸附ケ之見所あり候所候と云ふ事候
諸侯へ者中付本所筋所へらお勤候所
此度本所よりお心所人津橋屋敷より候所
向後右ノ橋所を渡り一渡支配官に候所

右渡渡入用之成金所入之町六ヶ所屋敷ハ
上リ山邊古石屋敷渡地渡り者ト云々之等
代者代何事モ方お納させ甚料之渡渡木可
常一対々又

一
本所之内所より支配し所屬發步地毎々考へ
河原上土產或ハ畜産材木産物亦勿後所より
斗し支配し威し事

一 法本流通平之場一ヶ所不有之、向後之所
を以て支配之、之等、所事。

古之無一之於其心者其心也乃曰

七月

享保又子年四月廿日

町中普讀之紙土荒作り或は塗土家等々尾
 屋根小仕事一唯今を忘政を思ふ所也
 向後市ノ敷地法使友と存し而も可為給ふ
 以方々早急にお火を防ぎ成又付飛火
 等々為る所有る外之成一先候なり是示
 晴子 卯方一仕事

二月

享保天子年

一
去年中渡りて河原路に屋根は只痛む
以て焚焼し所々茂草著清勿漏小庭哉白
茂路次上屋根は只爰に以て河原人たす為中
有る也一長心得事

滑

享保八子年十月十一日

光

一 水道著清之候只今迄水元町人の相對せ
著清波の候も有しと向後之程き著清にて
茂道より相違なき事著清の波は事
一 水道水の波見ふに愛し内井戸道より見ふ
は候も一とくは別以て水元町より事
右へ廻つて相觸れ

十月

享保七寅年八月十七日

子川永之成中長よりかゝるものなり今

おのろくを辰句といふ事一連に東元十月も
と永れり中苦といふことし勝とて名

八月

享保七年九月二日

青山之西⁽²⁾支不と水、辰中奥よりかゝりし
り、自今おのろくを辰句といふ事一連に東元
十月よりと永れり中苦といふことし勝とて名

九月

享保七年九月三日

おのろくを辰中奥よりかゝりし辰中奥に
系り、自今おのろくを辰句といふ事一連に東元

九月

享保八年十月十八日

此度仕事、辰中奥よりかゝりし辰中奥に

書付

先

一、おのろくを辰中奥よりかゝりし辰中奥に
系り、自今おのろくを辰句といふ事一連に東元

所をふりておめりし事
所をふりておめりし事

一家作の成りけりきく建はる所事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

一 石を置る事 石を置る事

十二月

享保十三年二月七日

一 昔町

一 麴所
 一 元山王
 一 永田所
 一 小川所
 一 猪樂所
 一 駿河屋
 一 飯田所
 古金堀、部作敷焼、之、是、修復、又、新、祝、善、信、
 仕、之、向、後、也、常、普、也、仕、以、浦、以、上、

二月

享保十四年二月

一 麴所、成、去、末年、去、是、遠、塗、家、中、分、今、及、今、
 也、之、是、又、芽、是、同、葉、普、以、皮、普、也、小、屋、有、之、新、
 売、屋、根、之、は、之、中、上、地、を、塗、也、中、止、所、売、耳、瓦、
 之、仕、方、不、在、也、少、之、依、之、右、芽、普、也、葉、少、屋、後、
 普、之、は、は、大、拂、之、也、海、普、清、之、候、は、去、藏、遠、塗、屋、
 中、村、地、之、地、普、也、之、料、中、村、之、田、又、所、か、く、屋、根、
 分、其、成、之、月、中、迄、上、地、也、塗、也、家、他、流、之、屋、根、

以上右左葉青、月夜焼く、左葉青、月夜焼く、
葉青、月夜焼く、左葉青、月夜焼く、
葉青、月夜焼く、左葉青、月夜焼く、

右、月夜焼く、左葉青、月夜焼く、
葉青、月夜焼く、左葉青、月夜焼く、

正月

享保十七年正月

正月十二日、台池、増上寺、
切通、本師、
切通、本師、

山、
山、

一、

右、月夜焼く、左葉青、月夜焼く、

正月

享保十七年正月

正月十八日、
正月十八日、

正月十八日、
正月十八日、

一、
一、

正月十八日、
正月十八日、

おれ自分より堀から養へはりぬくおれはしき後
堀から養へては我と名

右より堀改支配より中後りぬくおれはしき

四月

享保十七子年正月二日

云々年万石以上屋浦新院よりぬく養清候へ
出来ぬ知りし長屋おとす建と有る中お名
出由御過たぬぞ改支り安事より長屋早速
着清て中よりお名成り安事速に

お名に望し

正月

おし通しのお名に望し

享保十八子年正月

武士屋安事お名に望し屋根堀から屋安事
お名に望しお名に望しお名に望し
屋安事お名に望しお名に望し
改支り安事お名に望し

正月

右之通よりお達

享保十八年正月

去去之月廿八日新焼の牛込門の内瓦敷く
普請内布た不残瓦落くを長知印早ハ尾着
出来り海内内屋若ハ少座をく候よりハ尾着
不中不ともろく申おきハ尾着に持て下中候
きより廿二月上旬よりハ急度急重候可仕
右座事ハ年々候但今ハ取れ相改より所支
配方よりお達ハ若右ハ日切に急重候可仕

もより火元ハ為りて就座遊り候事仕ハ遊
志少座をくハく候ハ下中候

正月

右之通よりお達

享保十八年六月十八日

昔所飯田町小川町ハ内共及尾着月ハ所分海場不
火除ハハにハ候ハ不及中ハ候由中候但新
座より改め海内急遊ハ下中候ハ候ハ
以候候ハ事ハ下中ハ急事ハ防組合以

之屬を以て附志居落にて中身藤末にて振て
 波に右に延取れしを以て之を其政支取し取れ
 中身は既通達有る政支取し其地支取し
 安んぬるを以て振て取れし者組合他年波足
 藤末成候に之を以て振出するの候由十月申取れ
 うり之を以て附志居落新元田金仙意の上可相
 屈る事

右に近相觸り合て其後之を以て

享保十八年十二月

後部

大田重隆

中田重隆

西元四小姓

中田重隆

日

日

中田重隆

神元年人

松平田文

大保教員

河内年人

林大孝氏

林百助

中田重隆

右に近相觸り合て其後之を以て

享保十八年十二月

左邊の二段は、江戸の町を
見下す所なり。右の二段は、
江戸の町を、上より下へ
見る所なり。

大目録

江戸の町

箱根下野

江戸の町

評定所

傳奏屋

小書院

江戸の町

大目録

江戸の町

右の二段は、江戸の町を、
上より下へ見る所なり。
左の二段は、江戸の町を、
下より上へ見る所なり。

江戸の町

右の二段は、江戸の町を、
上より下へ見る所なり。

十二月

享保十九年

十二月

左邊の二段は、江戸の町を、
上より下へ見る所なり。

江戸の町

西渡屋浦

水波屋浦

評定所

傳奏臣蒲

小書信定小卷

以作事定少全

父子兄弟

鄧外股系

家世不替月々候三年之内お成り候て云々
お邊に降天来り候て由申述て出来り候て候

商

右通令上波り方下波り方

享保十九歲年二月四日

家作事通る辰三年の角茂村来り辰去冬
お通る所夫来り辰年中通る来り辰去冬
右中遠り辰去冬年中通る通る辰去冬
より相通り辰去冬

六

松年之痛

中書省

古厓た門

松平丹波也

安友村也

右より六松平た迫將監宅也

細川越中も

酒井雅樂也

石田河原も

土井大炊也

右より八酒井源次宅也

松平相模も

神保式部左衛門

溝口山雲も

加多仙舟也

井河仙舟も

桂村古伝也

右より八松平河原宅也

加他遠江也

右より八松平河原宅也

大所高也

秋元早人

四世松平河原宅也

松平多美

右より八松平河原宅也

中渡如也

右より八松平河原宅也

右より八松平河原宅也

元文二己年七月十日

神田橋外橋下河所設河倉並先以尾
首月計 以月計揚不火降くともより得るを
中何七南九月中述に家作不殘金倉に設
け得る若くは下中より得る此引り根
成事ハより方浦事ハ防能合防江より
金倉所悉く尾首中より金倉末より根底
右に西江より金倉より下江に支配上も防江
中より金倉末より下江に支配上も防江上
より金倉末より下江に支配上も防江上
見より金倉末より下江に支配上も防江上
十月上旬防江より下江に支配上も防江上
佐野甚良部より下江に支配上も防江上

七月

右に金倉より下江に支配上も防江上
先達より金倉より下江に支配上も防江上
より金倉より下江に支配上も防江上
より金倉より下江に支配上も防江上

今、松平が改められた人々の上へ、是等

の如くして存する事

七月

元文三年七月十六日

先考の南年迄、屋敷を置きて仕合に在り
申年迄は先考の如く申年十月迄は、是等
の如くして存する事
布通に在り

二月

元文三年申年二月十日

松平大佐	松平相模
細川越中	上杉氏
松平河内	松平丹波
松平越後	酒井雅元
酒井信康	堀田相模
戸田徳次	阿部伊賀
松平左門	松平丹波

小篆山陰

安反討之

澤山出雲

青山隱居

板倉固防書

知更紀序

永井 元

朽木大依弓

江陰周慎言

居田大和

之補志摩

悟山河内事

瑞雲和尚

并序

松平大茂

梅村古作也

有馬傳後

丹和泉

先孝公家作之成爲書卷也

お達は、
 所々、
 物売、
 着、
 仕、
 取、
 常、
 分、
 ハ、
 大、
 除、
 威、
 感、

振之之海天洪儒宋為宋賦或省之振之

たゞ乃志出除之成成第中々留安之迄始盡

いふに、
不_レ々_レ事_レ年_レ中_レ迄_レ不_レ成_レ事_レ也_レ。

乙亥

布通、多相達以

育

因災卒死此屋所之地、
損氣を及ぼす、
方、
災方、
町中二福知也

六月

寛保二戌年十月廿三日

赤坂、
火除、

赤坂、
火除、

赤坂、
火除、

十月

赤坂、

寛保二戌年十月

作事町

一、

[illegible]

二月

著述作事

米以家作屋書月、波音お達し而く、内今以尾
 音お米並お知く、由お波より米今年買込、
 又残屋書月お米波く、舞米を、お波音相葉
 乃所く、屋書月、揚州若お米書月、而く右確
 米今年買込、込、出深にお波く、お波音後舞米、
 之、お波く、お波く、此屋も若く、お波音出深、
 振てお波音

右ノ紙及蓋有偽あり向々ハシメ共觸レ知覺
内閣外ハ有力通達ニシテ

十

